

死のなかの風景

原民喜

青空文庫

妻が息をひきとつたとき、彼は時計を見て時刻をたしかめた。

妻の母は、念仏を唱えながら、隣室から、小さな仏壇を抱えて

来ると、妻の枕まくらもと許の床の間にそつと置いた。すると、何か風

のようなものが彼の背後で揺れた。と、彼ははじめて悲しみがこみあげて来た。彼はこれまでに、父や母の死に遭遇していたので、

人間の死がどのような取扱われるかは既によく知っていた。仏壇を見たとき、それがどつと彼の心にあふれた。それよりほかに扱われようはない死がそこにあった。苦しみの去った妻はなされるがままに床のなかに横よこたわっているのだ。その細い手はまだ冷えきつてはいなかったが、はじめて彼はこの世に置き去りにされている

る自分に気づいた。今は彼もなされるがままに生きている気持だった。

「僕は茫^{ぼう}としてしまっているから、よろしく頼みます」

葬いのことや焼場のことで手続に出掛けて行ってくれる義弟を顧みて、彼はそう云った。昨夜からの疲労と興奮が彼の意識を朧^{おぼろ}にしていた。妻のいる部屋では、今朝ほど臨終にかけつけたのに意識のあるうちには間にあわなかった神戸の義姉がいた。彼はひとり隣室に入って、煙草を吸った。障子一重隔てて、台所では義母が昼餉^{ひるげ}の仕度^{したく}をしていた。（そうだったのか、これからもやはり食事が毎日ここで行われるのか）と彼はぼんやりそんなことを考えていた。……心のなかで何かが音もなく頻^{しき}りに崩^{くず}れ墜^おちるよ

うだった。ふと机の上にある四五冊の書籍が彼の眼にとまった。それはみな仏教の書物だった。その年の夏に文化映画社に入社して以来、機械や技術の本ばかり読まされていた彼は、ふと仏教の世界が探求してみたくなった。それは今現に無慙な戦争がこの地上を息苦しくしている時に、嘗ての人類はどのような諦感^{ていかん}で生きつづけたのか、そのことが知りたかったからだ。だが、病妻の側^{そば}で読んだ書物からは知識の外形ばかりが堆積^{たいせき}されていたのだろう。それが今、音もなく崩れ落ちてゆくようだった。彼はぼんやりと畳の上に蹲^{うずくま}っていた。

それは樹木がさかさまに突立ち、石が割れて叫びだすというような風景ではなかった。いつのまにか日が暮れて灯のついた六畳

には、人々が集って親しそうに話しあっていた。……東京からやって来た映画会社の友人は、彼のすぐ横に坐っていた。ことさらに悔みを云ってくれるのではなかったが、彼にはその友人が側に居てくれるというだけで気が鎮められた。^{しず}床の間に置かれた小さな仏壇のまわりには、いつのまにか花が飾られて、^{ろうそく}蠟燭の灯が揺れていた。開放たれた縁側から見ると、小さな防空壕^{ぼうくうごう}のある二坪の庭は真暗な塊^{かたまり}りとなつて蹲っていた。その闇^{やみ}のなかには、悲しい季節の符号がある。彼が七年前に母と死別れたのも、この季節だった。三日前に、「きようはお母さんの命日ね」と妻は病床で何気なく呟^{つぶや}いていたのだが。……母を喪^{うしな}つた時も、暗い影はぞくぞくと彼のなかに流れ込んで来た。だが、それは息子^{むすこ}としてま

だ悲しみに甘えることも出来たのだ。だが今度は、彼はこれからさきのことを思うと、ただ茫として遠いところに慟哭どうこくをきいているような気がした。

妻の寢床は部屋の片隅かたすみに移されて、顔は白い布で覆おおわれていた。その部屋のその位置が、前から一番よく妻の寢床の敷かれた場所だった。彼女は今も何ごともなく静かに睡ねむりつづけているようだった。だが、四年前に拵こしらえたまま、まだ一度も手をとおさなかった訪問着が夜具の上にそつと置かれていた。電灯の明りに照らされてその緑色の裾模様すそもようは冴さえて疼うずくようだった。ふと外の闇から明りを求めて飛込んで来た大きな螳螂かまきりが、部屋の中を飛び廻って、その着物の裾のところに来てとまった。やはり死者

の気配はこの部屋に満ちているのだった。読^{どきよう}経がおわって、近所の人たちが去ると、部屋はしーんと冴え静まっていた。彼は妻の枕許に近より、顔の白布をめくってみた。あれから何時間たったのだろう。顔に誌^{しる}されている死の表情は、苦悶^{くもん}のはての静けさに戻っている。（いつかもう一度、このことについてお互に語りあえないのだろうか）だが、妻の顔は何^{こと}ごとも応えなかった。義母が持つて来たアルコールを脱脂綿に浸して、彼は妻の体を拭^ふいて行った。義母はまだ看護のつづきのように、しみじみと死体に指を触れていた。それは彼にとって知りすぎている体だった。だが硬直した皮膚や筋肉に今はじめて見る陰翳^{いんえい}があつた。

その夜も明けて、次の朝がやって来た。棺に入れる花を買いに

彼は友人と一緒に千葉の街へ出かけて行つた。家を出てから、ずっと黙っていた友は、国道のアスファルトの路^{みち}へ出ると、

「元氣を出すんだな、挫^{くじ}けてはいかんよ」
と呟いた。

「うん、しかし……」と彼は応えた。しかし、と云つたまま、それからさきは言葉にはならなかった。佗^{わび}しい単調な田舎^{いなかまち}街の眺^{なが}めが眼の前にあつた。（これからさき、これからさきは、悲しいことばかりがつづくだろう）ふと、そういう念想が眼の前を横切つた。……寝棺に納められた妻の白い衣に、彼は薄荷^{はつか}の液体をふりかけておいた。顔のまわりに、髪の上に、胸の上に合掌した手のまわりに、花は少しずつ置かれて行つた。彼はよく死者の幻想

風な作品をこれまでも書いていたのだが、だが今眼の前で行われていることは幻ではなかった。郷里から妻の兄がその日の夕刻家に到着していた。そうした眼の前の一つ一つの出来事が、いつかまた妻と話しあえそうな気が、ぼんやりと彼のなかに宿りはじめた。

霊柩車が市営火葬場の入口で停ると、彼は植込みの径みちを歩いて行った。花をつけた百日紅さるすべりやカンナなの紅が、てらてらした緑のなかに燃えていた。その街に久しく住み馴なれていたのだが、彼はこんな場所に火葬場があるのを今日まで知らなかったのだ。妻も恐らくここは知らなかったにちがいない。柩ひつぎは竈かまどの方へあずけられて、彼は皆と一緒に小さな控室で時間を待っていた。何気なく

雑談をかわしながら待っている間、彼はあの柩の真上にあたる青空が描かれた。妻の肉体は今最後の解体を遂げているのだろう。

（わたしが、さきにあの世に行ったら、あなたも救ってあげる）

いつだったか、そんなことを云った彼女の顔つきが憶いだされた。おも

それは冗談らしかったが、ひどく真顔のようでもあった。……し

ばらく待っているうちに火葬はすっかり終っていた。竈のところ

へ行ってみると焦げた木片や藁わらばい灰が白い骨と入混っていた。義

母はしげしげとそれを眺めながら骨を撰えり分けた。彼もぼんやり

側に屈かがんで拾いとおっていたが、骨壺こつぽはすぐに一杯になつてしま

った。風呂敷に包んだ骨壺を抱えて、彼は植込の径を歩いて行っ

た。すると遽にわかに頭上の葉がざわざわ揺れて、さきほどまで静ま

つていた空氣のなかにどす黒い翳りが差すと、陽の光が苛立つて見えた。それはまた天氣の崩れはじめる兆だった。こういう氣圧や陽の光はいつも病妻の感じやすい皮膚や彼の弱い神経を苦しめていたものだ。（地上には風も光もとのまま）そう呟くと、急に地上の眺めが彼には追憶のように不思議におもえた。

持つて戻った骨壺は床の間の仏壇の脇に置かれた。さきほどまで床の間にはまだ明るい光線が流れていたのだが、いつの間にかそのあたりも仄暗くなっていた。外では雨が降りしきっていた。湿氣の多い、悲しげな空氣は縁側から匂い上つて畳の上に流れた。時折、風をともなつて、雨はザアツと防空壕の上の木の葉を揺すつた。庭は真暗に濡れて号泣しているようなのだ。こうした時

刻は、しかし彼には前にもどこかで経験したことがあるようにおもえた。郷里から次兄と嫂あによめがやって来たので、狭い家のうちは人の気配で賑にぎわっていた。その家の外側を雨は狂ったように降りしきっていた。

二日つづいた雨があがると、郷里の客はそれぞれ帰って行つた。義姉だけはまだ逗とまりゆう留していたが、家のうちは急に静かになつた。床の間の骨壺のまわりには菊の花がひっそりと匂におっている。彼は近いうちに、あの骨壺を持って、汽車に乗り郷里の広島まで行つてくるつもりだった。が、ともかく今はしばらく心を落着けたかつた。久し振りに机の前に坐つて、書物をひらいてみた。茫ぼ然うぜんとした頭に、まだ他人の書いた文章を理解する力が残ってい

るかどうか、それを試^{ため}してみるつもりだった。眼の前に展^{ひろ}げているのは、アナトール・フランスの短篇集だった。読んで意味のわからない筈^{はず}はなかった。だが意味は読^よむかたわらに消えて行^いつて、それは心のなかに這^{はい}入^いって来^きなかつた。今、彼は自分の世界がおそろしく空洞^{くうどう}になつてゐるのに氣づいた。

久し振りに彼は電車に乗つて、東京へ出掛けて行くと、家を出た時から、彼をとりまく世界はぼんやりと魔の影につつまれて回^{まわ}転^{てん}してゐた。それは妻を喪^{なく}う前から、彼の外をとりまいて続^{つづ}いてゐる暗いもの悲しい、破滅の予感にちがひなかつた。今も電車のなかには、どす黒い服装の人々で一杯だった。ホームの人混みのなかには、遺骨の白い包みをもつた人がチラついてゐた。久し振

りに映画会社に行くと、彼は演出課のルームの片隅にぼんやり腰を下ろした。間もなく、試写が始つて、彼も人々について試写室の方へ入った。と、魔の影はフィルムのなかに溶け込んで、彼の眼の前を流れて行つた。大陸の暗い炭坑のなかで犇^{ひし}めいている人の顔や、熱帯の眩^{まぶ}しい白い雲が、騒然と音響をともしないながら挽^ば歌^{んか}のように流れて行つた。映画会社の階段を降りて、道路の方へ出ると、一瞬、彼のまわりは、しーんと静まつていた。秋の青空が街の上につづいていた。ふと、その青空から現れて来たように、向うの舗道^{ほどう}に友人が立っていた。先日、彼の家に駈^かけつけてくれた、その友人は、一瞥^{べつ}で彼のなかのすべてを見てとつたようだった。そして、彼もその友人に見てとられている自分が、まるで精

魂の尽きた影のように思えた。

「おい、なんだ、しつかりし給え」

「駄目なんだ」と彼は力なく笑った。だが、笑うと今迄^{まで}彼のなかに張りつめていたものが微^{かす}かにほぐされた。だが、ほぐされたものは忽ち^{たちま}彼から滑^{すべ}り落ちていた。彼はふらふらの気分で、しかしまっすぐ歩ける自分を訝^{いぶか}りながら舗道を歩いていた。友人と別れた後の舗道にはまたぼんやりと魔の影が漾^{ただよ}っていた。

週に一度の出勤なのに、東京から戻って来ると、翌日はがっかりしたように部屋に蹲っていた。妻が生きていた日まで、この家はともかく、外の魔の姿からは遮^{さえぎ}られていた。妻のいなくなつた今も、まだ外の世界がいきなりここへ侵入して来たのではなかつ

た。だが、どこからか忍びよってくる魔の影は日毎に濃ひごとくなつて行くようだった。彼は、ある画集で見た「死の勝利」という壁画の印象が忘れられなかった。オルカーニアの作と伝えられる一つの絵は、死者の群のまんなかに大きな魔ものが、どっしりと坐っていた。それからもう一つの絵は、画面のあちこちに黒い翼をした怪物が飛び廻っていた。その写真版からは、人間の頭脳を横切る魔ものの影がぞくぞくと伝わってくるようなのだった。人間の想像力で描き得る破滅の図というものは、いくぶん図案的なものかもしれない。やがて来る破滅の日の図案も、もう何処どこかの空間に静かに潜められているのだろうか。

暫しばらく滞在していた義姉が神戸の家に帰ることになった。義姉の

家には挺身隊ていしんたいの無理から肺を犯されて寝ている娘がいた。その姪めいのために彼は妻のかたみの着物を譲ることにした。箆たす笥すから取出した衣裳いしやうを義母と義姉はつぎつぎと畳の上にくりひろげて眺めた。妻はもっている着物を大切にして、ごく少ししか普段着ていなかったもので、殆どほとんがまだ新しかった。義母は愛着のこもった手つきで、見憶みおぼえのある着物の裾をひるがえして眺めている。彼には妻の母親が悲歎ひたんのなかにも静かな諦感をもつて、娘の死を素直に受けとめている姿が羨うらやましかった。ある日こういうことになる日が訪れて来たのか、と彼は着物の賑にぎやかな色彩を眺めながら、ぼんやり考えた。

広島までの切符が手に入ったので、彼は骨壺を持って郷里の兄

の家に行くことにした。夕方家を出て電車に乗ると、電車はぎつしり満員だった。夜の混濁した空気のなかで、彼は風呂敷に包んだ骨壺と旅行カバンを両脇にかかえて、人の列に挟はさまれていた。無事にこの骨壺を持って行けるだろうか、押しあうカーキ色の群衆のなかで彼はひどく不安だった。駅のホームに来てみると列車は満員で、座席はとれなかった。網あみだな棚の片隅に置いた骨壺が、絶えず彼の意識から離れなかった。荒涼とした夜汽車の旅だったが、混濁と疲労の底から、何か一すじ清せいれつ冽なもの働きかけてくるような気持もした。

その清冽なものは、彼がそれから二日後、骨壺を抱えて郷里の墓地の前に立ったときも、附つきまと纏まとつてくるようだった。納骨のた

めに墓の石も取除かれたが、彼の持つてゐる骨壺は大きすぎて、その墓の奥に納まらなかつた。骨は改めて、別の小さな壺に移されることになった。改めて彼は再び妻の骨を箸で撰り^{はしえ}わけた。火葬場で見た時とちがつて、今は明るい光線の下に細々とした骨が眼に泌^{しみ}みるようだった。壺に納まつた骨は静かに墓の底に据えられ、余りの骨は穴のなかにばら撒^まかれた。この時、彼の後に立つてゐる僧がゆるやかな優しい声で読経をあげた。それは誰かを静かにゆさぶり、慰め、あやしているような調子だった。彼は眼をあげて、高いところを見ようとした。眼の少し前には、ひよろひよろの樹木が一本、その後には寺の外にある二階建の屋根が、それらはすべてありふれた手ごたえのない眺めだった。が、陽の光

ばかりは遙かに清冽なものを湛えていた。

埋葬に列なつた人々は、それから兄の家に引かえして座敷に集つた。「波状攻撃……」と誰かが沖繩の空襲のことを話していた。その酒席に暫く坐っているうちに、彼はふと居耐らなくなった。何かわからないが怒りに似たものが身に突立つてきた。彼はひとり二階に引籠つてしまった。葬儀の翌日から雨が降りだした。彼は二階の雨戸を一枚あけたまま薄暗い部屋で、昼間から寢床の上でうつうつと考え耽つた。その部屋は彼が中学生の頃の勉強部屋だったし、彼が結婚式をあげてはじめて妻を迎えたのも、その部屋だった。ほのぼのとした生の感覚や、少年の日の夢想が、まだその部屋には残っているような心地もした。だが彼は悶絶す

るばかりに身を硬^{こわ}ばらせて考えつづけた。彼にとって、一つの生涯は既に終わったといつてよかった。妻の臨終を見た彼には自分の臨終も同時に見とどけたようなものだった。たとえこれからさき、長生したとしても、地上の時間がいくばくのことであろう。生きて来たといふことは、恨にすぎなかったのか、生きて行くということも悔恨の繰返しなのだろうか。彼は妻の骨を空間に描いてみた。彼の死後の骨とても恐らくはあの骨と似かよっているだろう。そうして、あの暗がりのなかに、いずれは彼の骨も収まるにちがない。そう思うと、微かに、やすらかな気持になれるのだった。だが、たとえ彼の骨が同じ墓地に埋められるとしても、人間の形では、もはや妻とめぐりあうことはないであろう。

三日ばかり部屋に閉籠つて憂悶を凝視していると、眼は酸性の
悲しみで満たされていた。雨があがると、彼は家を出て郷里の街
をぶらぶら歩いてみた。足はひとりでに、墓地の方へ向つた。彼
は墓の前に暫く佇^{たたず}んでいたが、寺を出ると、橋を渡つて川添の公
園の方へ向つた。秋晴れの微風が彼の心を軽くするようだった。
何もかも洗い清められた空氣のなかに溶け込んでゆくようで天空
のかなたにひらひらと舞いのぼる転身の幻を描きつづけた。

一週間目に彼は妻の位牌^{いはい}を持って、千葉の家に戻つて来た。つ
くづくと戻つて来たという感じがした。家に妻のいないことは分
つていても、彼にはやはり住み馴れた場所だった。彼は書齋に坐
ると、今度の旅のことをこまごまと亡妻に話しかけるような気分

に浸れるのだった。だが、ある日、映画会社の帰りを友人と一緒に銀座に出て、そこで夕食をとったとき、彼にはあの魔ものの姿が神経の乱れのように刻々に感じられた。窓ガラスの外側にも、ざわざわするテーブルのまわりにも、陰惨なものの影が犇^{ひし}めきあっているようなのだ。

「いつか自分たちで、自分たちの好きな映画が作りたいな」

彼の友人は、彼に期待を持たせるように、そう呟^{つぶや}くのだった。

だが、そういう明るい社会が彼の生存中にやって来るのだろうか。今、彼の眼の前には破滅にむかつてずるずる進んでいる無気味な機械力の流れがあるばかりだった。

食堂を出ると、彼はもつと夕暮の巷^{ちまた}を漫步していたくなった。

外で食事をとったり、帰宅を急がなくてもいい身の上になったことが、今しきりに顧みられた。彼は友人の行く方に従ついてぶらぶら歩いていた。

「橋を見せてやろうか」

友は彼を誘つて勝かちどき関橋の方へ歩いて行つた。橋まで来ると、

巷の眺めは一変して、広大無辺なものを含んでいた。冷やかな水と仄暗い空があつた。（やがて、このあたりも……）夕ゆうもや靄のな

かに炎の幻が見えるようだった。それから銀座四丁目の方へ引返して行くと、魔の影は人波と夕靄のなかに揺れていた。（このひとときが破滅への進行のひとつとしても……）靄のなかに動いている人々の影は陰惨ななかにも、まだかすかに甘い憂愁がのこ

っているようだ。だが、彼が友人と別れて電車に乗ると、夜の空気のなかから、何かぞくぞく皮膚に迫ってくるものがあつた。暗い冷たいものが身内を這^はいまわるようで、それはすぐにも彼を押し倒そうとしていた。（何がこのように荒れ狂うのだろうか）今迄に感じたことのない不思議な新鮮な疲れだ。家にたどりつくと、彼は夜具を敷いて寝込んでしまった。何か彼のなかに流れ込んでくる、それは死の入口の暗い風のような心地がした。彼はそのまま眼をとじて闇に吸い込まれて行ってもいいと思つた。しかし、二三日たつと彼の変調は癒^いえていた。

ある午後、彼は、演出課のルームでぼんやり腰を下ろしていた。彼の目の前では試写の合評がだらだらと続いていたが、ふと誰か

が立上ると、急に皆の表情が變つていた。人々はてんでに窓から地面の方へ飛降りてゆく。彼にもそれが何を意味しているのか直ぐにわかつた。人々の後について、人々の行く方へ歩いて行つた。人々が振仰ぐ方向に視線を向けると、丘の上の樹木の梢の青空の奥に、小さな銀色の鍵のような飛行機が音もなく象眼されていた。高射砲の炸裂する音が遠くで聞えた、丘にくり抜かれている横穴の壕へ人々は這入つて行つた。暗い足許には泥土質の土塊や水溜りがあつて、歩き難かつたが、奥へ奥へと進んで行くと、向側の入口らしい仄明りが見えて來た。人々はその辺で一かたまりになつて蹲つた。撮影機を抱えた人や、蠟燭を持った人の姿が茫と見えた。じつとしていると、壕の壁は冷え冷えとした。ふ

と彼にはそこが古代の神秘的な洞穴^{どうけつ}のなかの群衆か何かのようにおもえた。さきほど見た小さな飛行機も幻想のように美しくおもえた。……やがて、その騒ぎが収まると、後は嘘^{うそ}のように明るいつた。秋の午後だった。彼は電車の窓から都会の建築の上の晴れ^{わた}亘る空をぼんやり眺めていた。来るものが来たのだが、何という静かな空なのだろう。

来るものは、しかし、それから後、つぎつぎにやって来た。あの午後、家で彼は机にむかつて何か書きものをしていた。遠くで異様なものの音がしていると思うと、たちまちサイレンと高射砲のひびきが間近にきこえて来た。彼は机を離れて身支度^{みじたく}にとりかかった。

「おや、案外落着いていられるんですね」と義母は彼の様子を見て笑った。彼も自分自身の変わりように気づいていた。いきなり恐怖につんざかれて転倒する姿を、以前はよく予想していたものだ。だが、今は異常なものなかにあつても逆上は殆ど感じられなかった。妻がまだ生きていたらと……彼はふと思った。病妻が側にいたら、彼の神経はもつと必死で緊張したかもしれないのだ。今では死が彼にとって地上の風景を微小にしまったのだろうか。屋根の上の青空の遙かなところを、小さな飛行機が星のように流れていた。それは海岸の方向にむかつて散ってゆくらしかった。

ある夜、彼は東京から帰る電車のなかで、遽かに人々の動揺する姿を見た。と、車内の灯は急に仄暗くなりつついて電車は停車

してしまった。窓の覆いおおを下げるもの、立上って扉のところから外を覗くもののぞ、急いで鉄兜てつかぶとを被るものかぶ……彼はしーんとした空気のなかに、ぼんやり坐っていた。間もなく電車は動きだした。次の駅に着いたとき、彼の側にいる女が外をのぞいて、駅の名前を叫んだ。それからその女は駅に来る度たびに、駅の名を叫んでいた。ふと、短いサイレンの音が聴きとれた。灯は全く消された。

「ああ落している、落している」と誰かが窓の外を覗いて叫んでいた。サーチライトの交錯した灯が遠くに小さく見えた。今、彼は自分のすぐ外側に異常な世界が広がっているのを、はつきりと感じた。だが、何かが、それとぴったり結びつくものが、彼のなかから脱落しているようなのだ。彼はぼんやりと、まわりの乗客

を眺めていた。それは彼と何のかわりもない、もの哀しい^{がな}歴史のなかの一情景のようにおもえて来る。もの哀しい盲目の群のうちに、電車の終点駅で、人々は暗闇のなかの階段を黙々と昇って行つた。だが、そうした人々の群のなかを歩いてみると、彼にも淡い親しみと憐^{れん}憫^{びん}が湧^わいてくるようなのだつた。道路の方では半鐘が鳴り「待避」と叫んでいる声がした。線路の方には朧^{おぼろ}な闇のなかを赤いシグナルをつけた電車がのろのろと動いていた。

そうした哀しい風景は、過ぎ去れば、忽ち小さな点のようになって彼の内部から遠ざかつて行つた。彼はひっそりとした家のように坐つて、ひっそりとした時間と向きあつていた。どうかすると、彼はまだここでは何ものも喪失していないのではないかと思

われた。追憶というよりも、もっと、まざまざとしたものがその部屋には満ちていた。それから、もっと遠いところから、風のよなもののそよぎを感じた。そこには追憶が少しずつ揺れているようだった。世界は研ぎ澄まされて、甘美に揺れ動くのだろうか。静かな慰藉^{いしや}に似たものがかすかに訪れて来たようだった。……だが、そうした時間もたちまちサイレンの音で截^たち切られていた。庭の防空壕の中に蹲っていると、夜の闇は冷え冷えと独り悶^{ひと}えているようだった。太古の闇のなかで脅える原始人の感覚が彼には分るような気がした。

だが、ある夜、壕を出て部屋に戻って来た義母は、
「ああこんな暮しはもう早く打ち切りましょう。私は郷里へ帰りたい

くなつた」と切実な声で呟いた。すると彼にはすべてがすぐに了解できるようだった。一つの時期が来たのだった。病妻の看護のために彼の家に来ていてくれた義母は、今はもう娘のためにするだけのことは為し了えていたのだ。年老いた義母には郷里に身を落着ける家があるのだ。急に彼もこの家を畳んで、広島の子のころへ寄寓きぐうすることを思いついた。すると彼には空白のなかに残されている枯木の姿が眼よみがえに甦よみがえつて来た。それは先日、野菜買出しのため大学病院の裏側の路を歩いていた時のことだった。去年彼の妻がその病院に入院していたこともあり、感慨の多い路だった。薄曇りの空には微熱へいにうるむ瞳ひとみがぼんやりと感じられた。と、コンクリートの堀へいに添う並木の姿が彼の眼に力チリと触れた。同じ

位の丈の並木はことごとく枯枝を空白に差し伸べ冷え冷えと続いているのだ。それを覗いてみるとたちまち悲しみが彼の顔を撫でまくるような気持ちがした。が、もつと深い胸の奥の方では静かに温かいものがまだ彼を支えているようにおもえた。

「もう広島に行ったら苦役に服するつもりなのです」と、彼は東京からやって来た義弟に笑いながら話した。彼は郷里の街が今、頭上に迫って来る破滅から免れるだろうとは想像しなかった。そこへ行けば更にもつと、きびしい鞭や苛酷な運命が待ち構えているかもしれない。だが、殆ど受刑者のような気持で、これからは生きているばかりなのだろうと思った。ある日、彼は国道の方から路を曲って、自分の家の見えるところを眺めた。叢の空地のむ

こうに小さな松並木があつて、そこに四五軒の家が並んでいる。あの一軒の家のなかには、今もまだ病妻の寢床があつて、そして絶えず彼の弱々しい生存を励まし支えていてくれるような気がするのだつた。

引越の荷は少しずつ纏め^{まと}られていた。ある午後、彼は銀座の教文館の前で友人を待つていた。眼の前を通過する人の群は破滅の前の魔の影につつまれてフィルムのように流れて行く。彼にとつて、この地上の営みが今では殆ど何のかかわりもないのと同じように、人々の一人一人もみな堪えがたい生の重荷を背負わされて、破滅のなかに追いつめられてゆくのだろうか。暗い悲しい堪えがたいものは、一人一人の歩みのなかに見えかくれしているようだ

った。と不意に彼の眼の前に友人が現れていた。社用で九州へ旅行することになった友は、新しい編上靴をはいていて、生活の意欲にもえている顔つきなのだ。だが、郷里へ引あげてしまえば彼はもう二度とこの友とも逢^あえないかもしれないのだった。

「何だ、すっかりしろ、君の顔はまるで幽霊のようだぜ」

友は彼の肩を小衝^{こづ}いて笑った。と、彼も力なく笑いかえした。

彼は遠いところに、ひそかな祈りを感じながら、透明な一つの骨壺を抱えているような気持で、青ざめた空気のなかに立ちどまつていた。

（昭和二十六年五月号『女性改造』）

青空文庫情報

底本：「夏の花・心願の国」新潮文庫、新潮社

1973（昭和48）年7月30日初版発行

入力：tatsuki

校正：林 幸雄

2002年1月1日公開

2011年11月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、
ボランティアの皆さんです。

死のなかの風景

原民喜

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>